

校名：佐賀大学教育学部附属小学校

所在地：〒840-0041 佐賀県佐賀市城内2丁目17-3

電話番号：0952261005

記載日：H28年4月20日

記載者：岩永 悟

記載者役職：校長

本校の概要

創立：明治18年4月 勸興尋常高等小学校を
佐賀県師範学校附属小学校に代用

- M23.10 附属小学校の新築落成、開校式挙行
- S16.4 附属小学校を附属国民学校と改称
- S24.6 佐賀大学教育学部師範学校附属小学校と改称
- S26.4 佐賀大学教育学部附属小学校と改称
- H8.10 佐賀大学文化教育学部附属小学校と改称
- H18.10 本館耐震等改修工事
- H21.4～ 南棟等改修工事
- H22.2 管理棟改修工事完了
- H24.4 新入児定員を1学級35人に
- H26.10 体育館新築
- H28.4 佐賀大学教育学部附属小学校と改称



校風、おおまかな特色について：

所在地は「佐賀市城内」となっており、お城の跡地に立地している。佐賀の乱で唯一焼け残った、佐賀城鯨の門の横に本校がある。それで本校の子どもたちは「しゃちっ子」と呼ばれている。児童数は約600名、県の東部に位置し、お隣の福岡県大川市からも通学している。教員は全県下より平均1時間の車運転により、通勤している。

親や子のボランティア活動が活発に行われている。親のボランティア活動は現在9種類ある。「登下校見守り隊、挨拶運動協力隊、バスの中見守り隊」などである。子どもはボランティア活動のほか、お礼の手紙、お世話になった人の紹介等の活動、ハートフル委員会、エコクリーン委員会など名称から分かるように心を育む活動、環境美化活動に取り組んでいる。掃除を始め集団遊びなどは異学年交流をねらって縦割り班で活動している。先輩は後輩を優しく導き、後輩は先輩を慕っている。これが中学高校へ受け継がれている。

【不易の教育】

学習意欲を生み出し、習慣化させることを大切に
する。知識技能の習得と、これを活用して思考力・
判断力・表現力を育む。「生きる力」とリーダー性の
育成に取り組んでいる。生きる力の育成では、不確
定要素の未来を強く生き抜くことができるように、
食育を基盤に、知・徳・体を育む。リーダー性の育
成では、「良きリーダーはよきフォロワーでもある」
を合い言葉に、孤立者を出さない教育、チーム一丸
となって支え合う教育に力を入れている。

佐大附属小の教育方法

【習得、活用、探求】

アクティブラーニングの具体化

何を学ぶか+どのように学ぶか
方法〔例〕

- ▶ 言語活動、ICT利活用、体験活動
- 大学入試改革への準備

【流行の教育】昨今、課題となっている教育内容にも積極的に取り組んでいる。

(1) ICT利活用教育

国際競争力、コミュニケーションスキル



タブレットを使った体育の授業

電子黒板を使った算数の授業

(2) 英語の導入

三年生以上に英語科の導入構想？



英語を使ってコミュニケーション

ALTの先生と一緒に

(3) 道徳の教科化

思いやり、自己肯定感、社会参画、郷土愛
など



私のここに残ったことは！

今日の学びをみんなに聞いてもらおう

(4) インクルーシブ教育

高福祉社会の到来、共に助け合う人間



いつも私たちのためにありがとうございます



卒業生の活躍状況について：

- ① 追跡調査はしていない。
- ② 卒業生の進路等は、附属中学校の調査に委ねている。
- ③ 20年ほど前に実施の、創立100周年事業で作成した卒業生名簿があり、これによって状況を推測することができる。

勤務経験者が公立学校・教育委員会などへ戻った後の活躍状況について：

- ① OB の動向は、教科等ごとに毎年度始めに調査し、更新している。年に1回、本校職員の OB 会を実施している。
- ② 名簿は、研究発表会の案内、OB 会、訃報連絡などに活用できるよう、所属、役職、住所、連絡先などの項目を一覧にしている。教頭が管轄している。
- ③ 転出後は、県や市町の核として活躍している。教育長、課長、指導主事、研究主任など、役職は様々だが、担当した職務を全うすべく、研鑽している。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

1. 大学との連携：共同研究、小中連携

専門的知見を持った大学教員と小・中学校教員が共同研究に取り組んでいる。教育課題解決のため、第2期中期目標（H24～26年度の3カ年間）では「学びの連鎖が生まれる義務教育9カ年のカリキュラム研究」を行い、落ちや重なりのない9カ年のカリキュラムを構築し、小中の接続がスムーズにいき、教育が活性化するようにした。

H27～29年度の3カ年間では、研究主題を「21世紀型能力の育成を見据えた義務教育9カ年の学びの研究」とし、前研究で獲得した小中接続型のカリキュラムを生かしながら、近未来で必要とされる能力の想定、能力を育成するための教育内容の整備、育成のための指導法や学習法の整理に取り組む。また、教育の活性化を実現するための学習力や授業力の向上に取り組む。

以上の研究は個別に実践するのではなく、大学、小学校、中学校が連携して実践している。県下にも義務教育学校が設置されたが、先導的な研究開発としての位置づけがあり、先鞭をつける研究となっている。

2. 授業力の向上に特化した研究

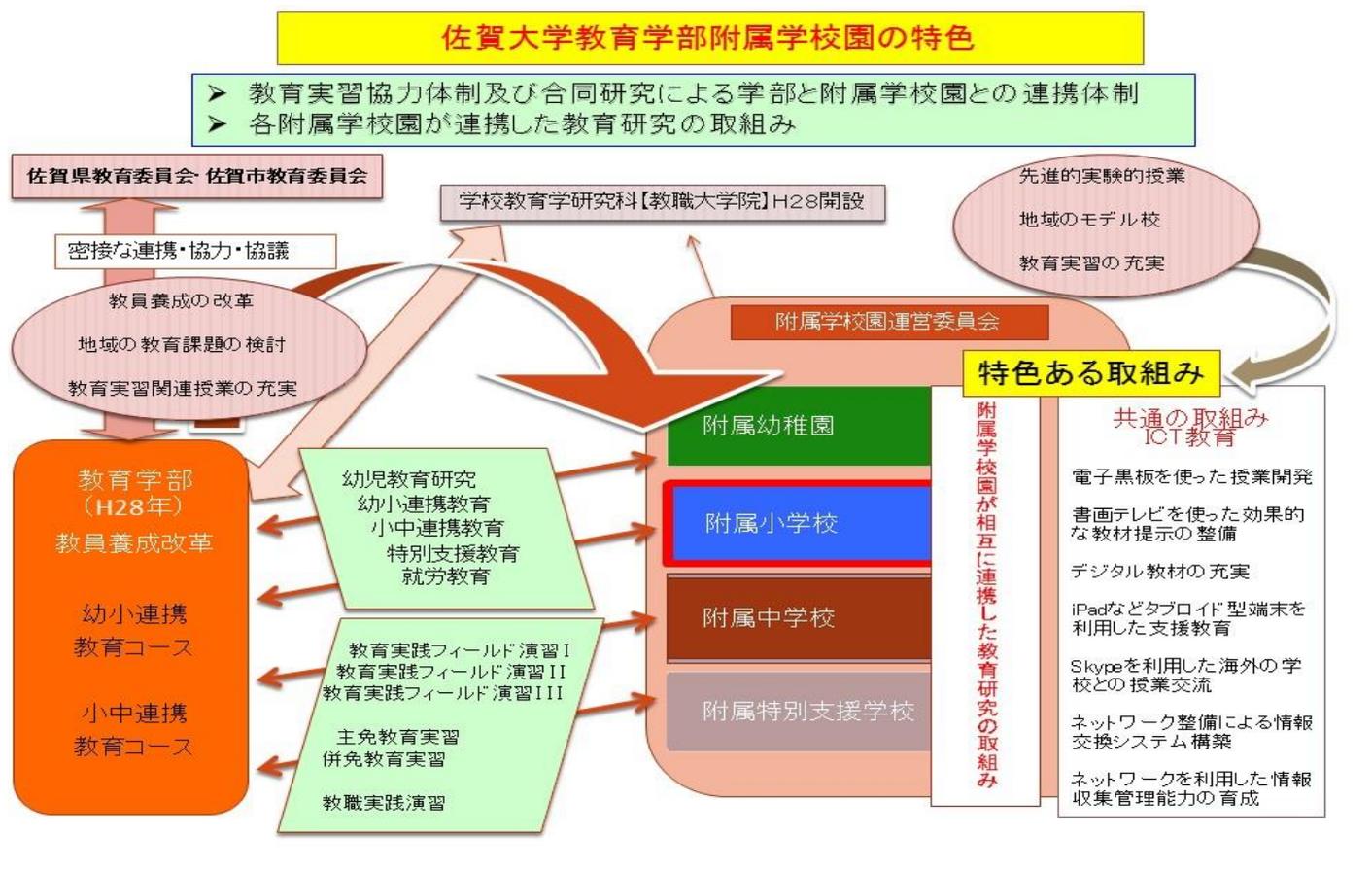
理論と実践が相補、往還することで、研究の目標達成に近づく。実践的研究に加えて、実務力としての授業技術の錬磨が必要不可欠となる。授業力の内実を学習者理解、教材研究、指導方法の三内容に求め、設計、展開、創造の三過程を設定して、それぞれの過程で必要な能力を修練する。これらは、教師各個人が自力で取り組む部分、教科等別に小グループで取り組む部分、時間を設定して教師全体が討議する部分から成り、それぞれの段階で設計力、展開力、創造力を鍛えていく。授業力を構成するこれら三つの力が個々の教師の能力として向上することにより、授業の質的変容が図れることになり、学習者が身を乗り出し、生き生きと学習する授業が実現する。授業の目的は学力向上であり、児童も学力を伸ばすために学習力を磨いていく。その具体的指導技術を取り出し、習得、活用していく道筋を本研究で明らかにする。

3. 地域との連携：教科等の事務局および支援

複数の教科が本校に事務局を置き、県下の教育研究に貢献している。各教科等の県会長を支えるのが事務局の役割であり、会長は県下の教科等教育が充実発展するように、事業計画・予算案を準備し、教育活動を推進している。本校教員は事務局及び役員などを殆どの教科等で務めており、会議等の会合は本校で行われている。本校教員の授業力、研究力、交渉力、企画力が県内の教科等教育の発展に大いに役立っている。施設としても機能としても、リージョナルセンターとしての役割を実質的に果たしている。

地域において、現在、どのような存在であるか：

1. 地域のモデル校・・・児童の教育を充実させ、その一端として教育研究の発表会を毎年行っている。教師研修の場ともなっている。また、内容の濃い教育実習を行い、県内外に教師を送り出している。
2. 研究活動の拠点・・・本校教員は各教科等の事務局及び役員として仕事をしているし、本校は会合等にも活用されている。
3. 公立学校の校内研修への援助・・・本校教師は、県内各学校の研修に講師として招聘されている。出先の学校で実際に授業を行い、具体的に話をするので、評判も上々であり、繰り返し校内研究会の講師の要請がある。
4. 大学と県の連携協力校・・・教育学部が県教委との連携協定を締結している。よって、県と大学との交流が積極的に行われている。人事交流や教育実習など、県教委と学部は二人三脚で県下の教育を充実させている。その一翼を附属小学校が担っている。



附属学校の存在意義について：

1. 県単位の行政が行われている以上、各県に教員養成大学や附属学校が求められている。
2. 県の教科等事務局の複数が本校に所在地をおいている。公立学校では、教科等の研究を推進することができないという理由から本校が請けている。
3. 県内の各教科の研究会は、講師として本校職員を招聘している。
4. 県内の支部長研修会や自主的研究会が本校を会場に行われる。平日や週休日を問わず活用できる学校は県内では他にない。リージョナルセンターとしての役割を果たしている。
5. 本校で教鞭を執った教員は、県や市町の核となってその任を果たしている。教え子たちも地元や中央、世界各地で日本の繁栄に貢献すべく、各々の組織を率いている。教員や卒業生はそれぞれの持ち場で活躍しているが、そういう人材の養成は、附属学校があるからこそ、実現してきた。